

平成 22 年度三番瀬自然環境総合解析結果概要（抜粋）

三番瀬における、地形、地質、流況、水質の物理環境は大きな変化はなく、安定しているが、青潮の発生状況は変わらず、生物生息環境は、厳しい状況が続いている。

生物については、底生生物の種類数、稚魚の利用状況、海藻類の状況、渡り鳥の飛来状況とも、大きな変化はみられていない。ただし、底生生物の個体数の減少が見られており、アサリについては、青潮や淡水放流の長期的な影響の可能性も示唆されている。

また、環境の多様性を高めている場として、三番瀬内の猫実川域河口域の泥干潟、周辺域の行徳湿地の後背湿地的環境と泥干潟がある。

今後も物理環境には大きな変化はなく、一次的な環境の攪乱はあるが、三番瀬の生物は攪乱に対する回復力を持つことから、急激な生物の変化はなく、鳥にとっての重要性も変わらないと思われる。ただし、長期的には外来種の拡大など底生生物の変化の可能性が指摘されている。

平成22年度三番瀬自然環境総合解析結果概要（現況）

大分類	小分類	結 果 概 要
地形・流況・水質	地形	<ul style="list-style-type: none"> ・沖合近くを除けば1980年度を基準とした場合、2008年度までの地形変化は概ね15cm以内の変動であり、三番瀬の地盤は比較的安定していると言える。沖合近くは、年平均で約1cmの水深変化（侵食）である。 ・2002年度以降、回復傾向として堆積と底質の細粒化が見られた。 ・波のエネルギーの経年変化及び出水の実績と地形・粒度組成の一時的な変化との関連性は明確ではない。
	流況	<ul style="list-style-type: none"> ・流れについて、明瞭な経年変化は見られなかった。 ・秋・冬には反時計回り、夏には時計回りの流れが卓越していた。
	水質	<ul style="list-style-type: none"> ・三番瀬データから、CODは横ばいであるものの、T-NやT-Pは沖合と同様に低下傾向であった。 ・青潮は、年間に数回発生する状況は変わっていない。依然として三番瀬における生物生息環境は、厳しい状態が続いているものと評価される。 ・三番瀬の浄化量は、補足調査時と比べて減少している可能性がある。
海生生物	底質	<ul style="list-style-type: none"> ・最近20年ほどでは安定している。
	底生生物	<ul style="list-style-type: none"> ・種類数は1987年度以降、大きく変動していないが、種によって増加・減少の変動がある。 ・個体数及び質重量は、2002、2006年度は過去と比べて少なかった。三番瀬の環境を構成する代表的な底生生物であるアサリは近年はやや減少傾向で、要因として、青潮や出水の発生等の可能性がある。底生生物全体の個体数（及び質重量）の減少の要因は不明である。
	魚類	<ul style="list-style-type: none"> ・1996年度以降、季節ごとに稚魚の優占種が入れ替わる状況は、基本的には変化していない。
	海草・海藻類	<ul style="list-style-type: none"> ・1988年度以降、アオサ属とオゴノリ属が多く確認された。 ・アオサ属、オゴノリ属等三番瀬の海藻類の生息状況に大きな変化はない。
	希少種	<ul style="list-style-type: none"> ・国・県によるレッドリスト等の希少種は底生生物は30種、魚類は9種、海草・海藻類は1種確認された。
	外来種	<ul style="list-style-type: none"> ・底生生物から、大きく増加しているホンビノスガイなど、21種の外来種が確認され、うち7種が外来生物法に基づく要注意外来生物に指定されている。
鳥類	個体数	<ul style="list-style-type: none"> ・三番瀬海域に代表的な25種について検討したところ、三番瀬のいずれかの時期で、平均個体数の有意な減少傾向が見られた種はシロチドリだが、全国的に渡来数が減少しているため、三番瀬に限った環境悪化を示唆するとは考えにくい。一方、有意な増加傾向が見られた種は9種であった。
	分布状況	<ul style="list-style-type: none"> ・主要な確認地点における分布状況で、経年的な変化が見られたのは14種であり、三番瀬から他の場所に移っている種はなかった。生息場所としての葛南地区内における三番瀬の相対的な価値は高いと考えられる。
	場の利用	<ul style="list-style-type: none"> ・シギ・チドリ類は、養貝場周辺、船橋海浜公園、日の出前面域、塩浜1丁目地先干出域が主な採餌場所として利用され、船橋海浜公園、防泥柵及びその周辺、塩浜1丁目地先干出域が主な休息場所として利用している。また、カモ類は、採餌及び休息場所ともに三番瀬の広い範囲を利用している。
その他	猫実川河口海域	<ul style="list-style-type: none"> ・三番瀬海域で泥質の浅場環境を有する区域で、生物の生息環境の多様性を高めている。
	行徳湿地	<ul style="list-style-type: none"> ・閉鎖的な潟湖的環境で、汽水環境が形成され、三番瀬ですでに失われたヨシ原を持つ泥質の後輩湿地的環境で、アシハラガニ、ベンケイガニ類、ヤマトオサガニ、トビハゼ、カワアイガイ等が生息する。

平成 22 年度三番瀬自然環境総合解析結果概要（予測）

大分類	小分類	予 測 概 要
地形・流況・水質	地形	<ul style="list-style-type: none"> ・堆積・侵食傾向の変曲点は日の出から茜浜を結ぶ線上にある砂州であり、その沖側斜面は侵食、岸側の干潟域は全般的には堆積傾向である。 ・一時的な変化に対して自然に復元する環境にあるが、問題はその治癒能力が今後衰えることなく持続されるかということである。砂州が崩壊するようなことがあれば、回復機能が損なわれる可能性がある。
	流況	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も三番瀬の流況に大きな変化はないものと考えられる。 ・現在実施されている三番瀬再生事業は、三番瀬の流況に著しく変化を及ぼすものではないと考えられる。
	水質	<ul style="list-style-type: none"> ・今後も、青潮が年間数回発生する状況は維持されると推察される。 ・現在実施されている三番瀬再生事業は、事業のスケールが比較的小さい事業であることから、その効果は局所的になるものと推察される。
海生生物	海生生物	<ul style="list-style-type: none"> ・淡水放流や青潮といった一時的な攪乱への回復力があるので、今後5年、10年程度において一方的に減少し続けるようなことや、優占種が大幅に変わってしまうというような変化は考えにくい。 ・しかしながら、今後も続くと考えられる、淡水放流や青潮によって、長期的に、外来種の拡大など、底生生物の種組成や分布が変化する可能性がある。
鳥類	鳥類	<ul style="list-style-type: none"> ・今後、谷津干潟や行徳鳥獣保護区の環境が短期間で急激に改善するとは考えにくいことから、短期的には三番瀬の葛南地区における相対的価値は高いまま維持されると考えられる。 ・三番瀬内での堆積傾向が続けば、水際で採餌を行うシギ・チドリ類の採餌可能な場所が広がると考えられる。 ・スズガモについては、個体数の増減傾向がはっきりしていない。